



過ぎ去りし日々は
美しき幻影



月野 楓

消えない虹

僕たちの間に降っていた雨も
ようやくあがり
晴れた空に虹がかかる

眠れない夜に
暗い部屋で一人手を伸ばし
君を探していた日々も終わったのだ

チャペルの音が
鳴り響く錯覚を覚えながら
僕らは手を握り
小高い丘に登り虹を見つめる

この虹が僕らの胸の中で
いつまでも消えないように

この虹が僕らの心を
いつまでもつないでくれますようにと
君を握る手にそっと力を加えた

砂漠の街で

カラカラに渴いた喉では
君のために歌さえ歌えやしない

砂漠のような街では
種を蒔いても意味はない
そう、種が悪いわけではない

この大地が
聖なる雫を一滴も
僕らに与えてくれやしないのだ

でも僕に限らず
誰もが乾くに違いない水を
砂漠に蒔いた種にかける
ほのかな希望を胸に抱いて

頼むから
僕のもとに来て
この渴いた喉を潤してくれないか
君のために歌を歌いたいんだ

あの頃は

昇る朝日の非情さに

やりきれなさを感じていた

会えない日々が長くなるほど

二人の愛は燃え上がり

もう二度と来ないこの時を

二人でかみ締めていた

高く険しい山であるほど

登りつめることは苦しいけれど

頂上を目指してみよう

重い荷物はみんなおいて

もし君が途中であきらめても

君の手を握り連れて行こう

登りつめたときの充実が

たとえ刹那の喜びとしても

また君の手を握り締め

新たなる頂上を目指したい

互いに愛を寄せ合い
ローソクに火をともし
そして僕は君の瞳をみつめる

ローソクの火は
二人の愛の具現のように
暗い部屋をほのかにてらす

その火は頼りなくゆらめき
ほんの些細な風で
かき消されるかもしれない
あるいは
簡単に燃え尽きてしまうかもしれない

しかし
その不安がいつそう
この火をいとおしくさせる
この火を永遠に灯していたいと思わせる

この世の果て

海の匂いをかきながら
水平線を見ていると
背伸びをしてみたくなる
もしかしてあの先は
行き止まりかと

理屈では前に進めば
またここに戻る
でもそんな現実
この世界の矛盾のように思えてくるのだ

僕の意味に反して
僕は時の流れに乗って進んでいるし
僕の意味、
あるいは僕の意味に反して
その流れから降りる時
僕の行き止まりは必ず来るのだ

だからいつも海に来ると
すこし背伸びをしてみたくなる
どこかに
この世の果てがあると
思いたくてしかたがないのだ

星の光で

暗い部屋に時計の音
苛立ちをおぼえ
外に飛び出すと
夜空は満点の星

流れ星の音さえ聞こえそうな
闇に溶け込みそうな
そんな静けさ

大きく息を吸い込むと
星の光はやさしく
僕の心を癒してくれる
そしてまた
僕は輝きはじめる

恋する理由

いくらきれいな花であっても
いつかは枯れる
いくら息をのむ程の花火であっても
闇にのまれる

恋におちた誰もが
こんな現実を忘れ永遠を願う
いや永遠を見る

その想いが現実とズレはじめると
薔薇の刺にも似た痛みが
心を突き刺すが
それでも人は恋をする

恋は孤独をさけ
その想いは不安定であるがゆえに
美しいものだから

花火

いまさら言うことでもないが
人生は不毛であるし
言葉は無意味である

深刻に物事を考えようとすればするほど
真実は離れていくものであって
近づくことはない

時は人を刻んでいき
物は壊れていく

恋が永遠に続くことはない

しかし
たとえ刹那の喜びであっても
花火のように
美しいと思える瞬間が
人生の中にあることは救いであり
その美しいと思う感情は失いたくない

夏色の鼓動

通りを吹く風が
夏の匂いのしだす頃
窓から見える景色が
緑色に染まる頃
僕はようやく
大地からよみがえる

暑い夏の日には
僕の中にあつたもどかしさが
なにかの形をなし
なにかの意味をたずさえ
生まれてくるのだ

夏色の鼓動は
とても強く
とても激しく
たとえ無意味に時を過ごすとしても
たとえなにかを失うとしても

誘惑に身をこがす
人の目など気にせずに
たとえ狂騒的未来におちてゆくとしても

自分が思い描く未来への
信念や理想に押し戻されても
今は大いなる渦の中へ

何も見えやしない
時さえ無意味な虚無の中へ
放り出されようと

心の鍵をあけて受け止めてみよう
きっと退屈な毎日にピリオドを打てるだろう

もっと自分らしくなるために
もっと世界が単純に思えたあの頃に戻るために

月に濡れたふたり

蒼白く光る涙を
もう 受け止めきれないでいた
一番近くにいて一番大事な人を
失うかもしれないのに

湖面に映る三日月は
寂しげに僕らをてらしていた

流れ星が
僕らの隙間を通り抜けていく

感動

まだ青春と呼ぶにふさわしい年頃には
僕に限らず世間一般の人々も
そうであるように
何かにつけて感動したものだ

この時期をひとたび
通り過ぎたと思い始めた頃には
もう心の中に穴があき始め
心に響かなくなる
感情の耳が悪くなり
音をより高くしないといけなくなる

常に新鮮であり続けるためには
ためには心のつるを外し
一つ一つの出来事を
もっと素直に受け止めてみよう

すべてが真新しく感じる子供のように
もっと生き生きとした毎日を
願う人であればなおさらだろう

時の流れ

時は流れている
僕は立ち止まり
将来のことを考える
僕の足元には下降するエスカレーターが
ギシギシいって動いている
立ち止まっていると思っていたのに
そして
それは確実に死まで続いている

よく君は宝石に例えると
原石のようなものだ
磨けば光るなどという人がいる
うんざりする
純粹だった幼い頃の心には
傷ばかりついて
世間を曇りガラスから
見る人間に変えた

そしてそれが社会であり
人間であるのだ
磨けば光るのは悪知恵だけだ

エスカレーターは動いている
確実に下へ
僕が心に傷のない日に
戻ろうとするなら
走ってエスカレーターを
逆に昇るしかない

そして
つかの間の恋をする
つかの間の休息をえる

恋は路傍の花
恋愛沙汰には興味がない
なんて嘯いてみても
目を閉じれば
君が見える

澄み切った空に浮かぶ雲が
夕日色に染まる頃には
二人の自由は
もう手の届く所に

夜の帳が降りる頃には
やっと素直になれる
闇は僕の心を
静かに覆い隠し
目を閉じていても
君を見つけられる程
僕は純粋に君を求めている

夜風が街を横切り
その風と共に
街を彷徨い歩いた頃に
探し求めた希望の光を
僕はやっと見つけていた

あてもない日々

僕には夢があるのだろうか
窓から空を眺めたり
眼下を通り過ぎる車を見たりと
あてもなく時を潰しているとふと思う

あいまいな目標に伴う
あてもない努力は
空回りするだけで意味はない
以前僕の中に確かに存在した
はっきりとした方向性のある夢は
今はぼやけかすんでいる

もしこのまま本当に
夢が消えてしまったら
生きる意味などなくなるだろう
人は夢を心に描いて生きる動物なのだから

闇で伸びる心の根

幸せであると思うがゆえに
物事に鈍感な人
不幸せであると思うがゆえに
他人を思いやれる人
その違いは何処からくるのか

人の精神の発展は
悲しみからくる

肌の色まで黒く染まりそうな
闇の中に身をおいたことのある人は
幸いだろう

その人にとっては
たとえ小さな光でさえ
救いであるのだから

日の光の下で
希望の光を見出すことなど
できやしないことを
知っているのだから

幾千年の時を越えて

幾千年の時を越えて
君を探しに旅立とう

幾千年の時を越えて
君に想いを伝えよう

幾千年の時を越えて
君の笑顔を取り戻そう

世界がたとえ夢だとしても
君の笑顔を信じよう

幾千年の時を経ても
変わらぬ想いをこの胸に

いつも隣で囁いて

心地よい音色の声が
耳をくすぐる
やわらかな風のように

朝 いつもそんな夢をみたりする
誰もいない

まぶしい朝日に問いかける
今日はそんなに輝いてるの
闇に包まれたままの癒しがまだ足りない

そんな時 いつも思ってしまうんだ
いつも隣で囁いていた君を

春風

壊れかけの飛行機が
なんとか飛び続けるために
どんどん積荷を投げ捨てるように
自分も今までいろいろ捨ててきた

春風はもう一度
自分を大空に飛ばしてくれるかな
それとも
季節外れの雪でも吹き荒れて
さらなる警告するのかな

飽き飽きしてる毎日に
勢いある風を求め
その風をつかみたい

さよなら

失くしたものを拾い集めようと
ひどく悩んだけど
失くしたもの 後悔するより
未来に繋がる今をって
思うのは春だからなのかな

ずいぶんといろんなところで
つまずいたり転んだり
かどがとれて まるくなったけど
そう、だるまみたいに
いつかはちゃんと立てる

だから今は眠れない夜でも
一人でいれる
この夜空が見える窓際の部屋の机で
書きながら・・・

あいつとこいつ

女神の化身と呼ばれたあいつは
もうその面影もなく
世間一般の中に埋没している

暗く冷たい土の中で
ひたすら耐えぬいたこいつは
ようやく人並みの人生をおくる
この二人は
どのように今の自分の状況や
社会の成り立ちを考えているのだろう

時が流れ一歩一歩歩んだ道が
その人間の道をつくる
時には立ち止まり
自分の足跡を見つめてみよう

僕は幾度となく
自分の力や現実の社会に
絶望してきた
そのたびに僕は
立ち止まり
沈む夕日を眺め
昇る朝日を待ちこがれた
それは
自分の中の濁りを取り去るための
唯一の方法であった

自分に降りかかるある種の流れを
押し戻そうとしたり
飛び越えようとするよりも
その流れの中へ身を投げ
溶け込むことで
その流れの本質を知り
僕の心も癒されていた

歪み

しっかり目を見開いて現実みても
どこかねじれてる

好きな人に好きって言うことが
以前は簡単に出来たのに
今ではそんな素振りもできない

どこか 歪んでいる

癒してくれるものは あるのかな
癒しの風を求めて走り回る毎日

失くしてしまってから分ることって沢山ありすぎて
失くさないように 小さくなってしまおう自分が嫌で

Love never dies

夜明けが毎日くるように
大地は何度でもよみがえる

時計の針がたとえ12時回ったとしても
また12時目指して時計は回る

風の歌声や川のせせらぎも
悠久と思わせる安らぎを僕にあたえてくれる

だから、もうなにも心配することはないよね
愛は決して消えないし
愛という名のもとに
この世界が成り立っていると
思えてくるんだ

きっと 君にも聴こえてくるはずだよ
Love never dies.....

Infinity Zero

悩み、迷い・・・

すべてを無に消し去るには・・・

限りなくクリアで透明な場所を見たいな・・・

何処にあるのかな

もしかしたら 近くにあるのに見逃してるのかな

誰かと見た景色が一人だと

殺伐としてるみたいだね・・・

Believe

誰かを信じたい

誰かに信じてもらいたい

この腐敗した世界に届く光をみたい

信念がないと すべてがぐらつく

信じる気持ちは 生き物の基盤なのだから

今も 頑張っていますよ？

君に逢えた時はちょっとだけ
逢えないときは 時計の砂が落ちたぶんだけ
愛を紡ぎます

昨日夢見た今日が もし 今なくても
めげずに 夢を紡ぎます

大地が日の光を欲していても
空が不機嫌な雨雲のままでも

女神の涙は雪となり

女神の涙は雪となり
大地にそっと降り立つ

女神の涙は雪となり
アスファルトに降り積もる

女神の涙は雪となり
荒廃した世界を銀色に染める

女神の涙が溶ける時
世界は再生し 希望で満ちる
女神は微笑み
大地から新たな命が芽吹き始める

絆を探して

夕日が沈む頃に
別れなければいけなかった頃には
世界はもっと単純で
二人は遥か遠い未来まで
夢見ていた

二人の鼓動が
手を取り合う頃には
二人は闇に溶け
生をかみしめていた
二人の間には
もう周りの雑音や誘惑に惑わない
確かな絆が芽生えていた

でも 花火のように消えてしまう
消えない絆は探せないまま
信じるって どういうことなのかな

Desire

失ってしまったものが何時しか夢となり
彷徨い歩き
ふと夜空を見上げると
君の八重歯のようなきらめく星があった

失われし時は
崩れゆく砂の城からみた光景のように
かすみぼやけてて

この夜空の星のように
君の笑顔を見ることで
癒されるのかな

君の笑顔を見るたびに
そんな気持ちにさせられる

世界の片隅で

声が聞きたくて
何故だろう

君が囁く声に癒された昔の自分が
泣いてるのかな

夕暮れの海
波の音しか聴こえなかったけど
君の声を 思い出して

世界の片隅で
そっと
そっと 囁いてくれたね

崩れ去る時の狭間で

季節は肌寒くなりゆくこの頃
目にする光景は儚くなり
虫の声ももう 届かない

瞳 閉じれば
思い出すは
呪われし過去の幻影

すれ違いのパズルのピース
組み合わせながら
なんとか騙して生きてみる

いつか救済された自分を夢見て

心静かに

限りなく透明に近い
無垢で汚れなき心で

そっと瞳を閉じてみる
静かに

天の祝福のような雪が舞い降りて
夕闇の中をやさしく彩る
君は綺麗ねと言う
僕は頷いた

ワムのラストクリスマスが
うっすらと遠くで聴こえている

聖なる夜は
君に白いベールをかぶらせて
闇を照らす光にかえた

眩しすぎて今の僕には

そっと 瞳をひらくと
かすんで
ぼやけてしまって

innocence

一人でいたときには
一人でいることなんて
寂しくなかったのに

誰かと一緒にいた時間があって
そして流れ星のように
消えてしまった今があって

離れていくなら
もう近づかないと思ったり

だから君と話すと
愛しさとせつなさが
こみあげてきます

あふれる想い

心からあふれる想いを伝えよう

人知れず泣き濡れた夜を越えて
窓辺から星を見上げ願いを託した夜を越えて

静かな海辺で一人黄昏た夕暮れを思い出して
春の雪解けの可憐な水の音を期待して

ノクターン

闇より出でし生ける屍
滴る紅き雫を飲みほし
月夜の晩に可憐に舞う

永久の命の退屈さ故
生を滅すことで
存在価値を見出しながら

いつしか辿りつく星の岸辺を夢見て
今宵も奏でる ノクターン

夏の終わり

夏の終わりの波の音は
心の足跡を静かにさらって

二人で交わした約束は
海辺につくった砂の城のように
崩れ去り

ノアの箱舟は現れなかった

でも 走り続けなければならない
メロスのように
確固たる信念をもって

夕日が差してきて
僕を後押しする

ひぐらしが鳴く夕日を照らす海辺で
小さい頃 田舎で見た蛍を思い出した

はかなくて か弱く光る 淡い光
目を閉じて淡く光るその光を思い描く

消えそうに光っては消えてまた光って

その光で

泣きたい夜にささやく
遠き日の歌
儚き夢を静かに覆う

水のないプールの様に
心に出来る意味のない空白

淡い月に
ひそかに願う

その光で
昨日の自分を消してください

その光で
今の自分も消してください

あの時の歌をもう一度だけ

会わなくなって
もう何度目の春

色褪せた その頃着てた服
そろそろ着れる季節

さよならもうまく言えずに

風がまだ冷たくて

声が聞きたくて